

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 25 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520483

研究課題名（和文） 明治以降の文学作品に使用された外来語の実態研究

研究課題名（英文） A Study of Japanese Loan Words from Literary Works of Meiji, Taisho, and Showa Eras.

研究代表者 飛田 良文 (HIDA YOSHIFUMI)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・名誉所員（独立行政法人国立国語研究所）

研究者番号：40000418

研究成果の概要（和文）：明治・大正・昭和の文学作品 101（初版本 49 冊）を熟読し、外来語 25,899 例を採集し、その用例文に所在を示し、作品別出現順用例集を作成した。その外来語見出しに、原語・固有名詞（人名・地名・作品名など）・語構成（単純外来語・複合外来語・和製外来語など）の情報を加え、「外来語語別年代順用例集」1～5 を作成し印刷した。参考にした外来語辞典や国語辞典に判断の異なるものがあり、正確な移入時期と原語を判断するために、今後も用例採集の必要性を痛感した。

研究成果の概要（英文）：This study examines Loan words to trace Japan's modernization during Meiji, Taisho, and Showa eras. This study brought the results of 5-volume reference work (*Chronologically Arranged Study of Loan Words*) that gathered 25,899 Loan words from 101 literary works (49 in original editions). Using various examples, the study traces the origin of Loan words by their language of origin, timing of arrival, and usage in the Japanese language. The study calls for continuing the study of Loan words to better understand the historical evolution of modern Japanese language and define its origin and timing of arrival.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：語彙・意味・外来語・語構成・日本語学

1. 研究開始当初の背景

外来語の研究の現状は、飛田良文・中山典子共編「外来語研究文献目録」（飛田良文編著『英米外来語の世界』南雲堂 1981）によって知られるが、その後は文献目録を作成し、現状を確認した。それらの研究は、一語一語の語史研究か共時的分析であって、本研究の

目標とするような通時的、計量的考察は存在しなかった。

2. 研究の目的

明治以降の文学作品には、日本の近代化にともなう西洋化が色濃く反映している。日本人は西洋文化の概念や事物や制度の移入に

あたって、新造語・借用語・転用語（在来語に新しい意味を追加して訳語に転用した新語）の3種類によって対応した。借用語には、漢語と西洋語とがあるが、ここでは漢語を除いた西洋からの借用語を外来語と呼ぶことにする。その外来語が、明治・大正・昭和とどのように使用されたか、その実態を明らかにする。具体的には

- (1)外来語はいつ、どこの国の言語から入ってきたか
- (2)そのとき、漢字で表記されたか、片仮名か平仮名か、ローマ字表記か、振り仮名・振り漢字・振り外国語は存在したのかどうか
- (3)外来語の語構成はどのようなものであったか、混種外来語の成立、和製外来語の成立はいつか
- (4)意味分野からみると、外来語を必要とした分野はどこか、など。

3. 研究の方法

- (1)調査対象を初版本とした。底本には、初版本・全集本・文庫本・発表雑誌・発表新聞など、発表文献に種類がある。写本については詳細な研究が行われているが、活字本についての書誌的研究はなかったが、松井栄一「現代語研究のために—明治期以降の著作物のテキストについて—」（『国語と国文学』第70巻第10号1993）によって、底本を何にするかによって結果に相異の出ることが明らかにされた。そこで、外来語についても底本を何にするかについて考察を行った。『明治以降の外来語史研究』（平成6年度～平成8年度科学研究費補助金、基盤研究(B)研究成果報告書、研究代表者 飛田良文）に鈴木庸子「森鷗外の『雁』における書誌的研究 原本と全集本との比較」、木下哲生「発表雑誌・単行本・全集本・文庫本における用例文の資料的価値—遠藤周作『海と毒薬』の場合—」の考察がある。発表年を重視するか、執筆者の完成度を重視するかで底本は変わる。私は作品の完成度を重視する。全集・文庫本の本文は、用語が変更されたり、表記が変更されたりしているからである。時代の反映と、作者の完成度を考慮して、初版本を底本とした。用例の信頼性を重視した点に特色がある。
- (2)外来語の判定についても、考慮すべき点がある。アルファベット表記されたものは外国語、片仮名・平仮名・漢字による音の当字は外来語とする。ただし、明治前期には「リバティは自由と訳す」のように、今日ならlibertyとアルファベットで表記するところを片仮名や平仮名で表記するものがある。これは片仮名でも外国語に分類しなければならない。作品を熟読して外来語を判定しなければならない。
- (3)作品の選定。外来語は時代の動向を反映

するので、文学作品も名作と呼ばれているもののほか、時代を反映するものを選んだ。明治期は、松村春輔「春雨文庫」（1876）戸田欣堂「情海波瀾」（1880）坂田銘々道人「汗血千里駒」（1883）などから外来語を採集し、大正期は私小説の勃興、大正デモクラシーによるプロレタリア文学を考慮し、宮島資夫「恨みなき殺人」（1920）や葉山嘉樹「海に生くる人々」（1926）などから外来語を採集した。昭和初期は徳永直「太陽のない街」（1929）小林多喜二「蟹工船」（1929）などから、戦時中は、獅子文六「海軍」（1943）に目を通した。戦後は、基本的に大衆向けの作品から、松本清張「点と線」（1958）、野坂昭如「死の器」（1973）などを対象とした点に特色がある。

4. 研究成果

平成22年度から平成24年度の調査は、作品数101（単行本49冊）が完了し、外来語用例文25,899を採集した。熟読し、採集し、用例文を入力する作業は、予想以上の時間を要した。更に、その用例文の校正と訂正も容易ではなかった。作品別出現順用例集を出力し、校正後、語別年代順用例集を出力し、そこに外国語見出し、外来語表記見出し、外国語の原語（英語かフランス語かドイツ語かオランダ語かポルトガル語かなど）を記入し、その外来語が固有名詞（人名・地名・作品名など）を判別し、その外来語の語構成（単純語か複合語か、和製外来語かなど）を判定し記入した。用例文には、作品名と所在（ページ・行）を記した。その成果は、一冊約500ページの「外来語語別年代順用例集」1～5の5冊として印刷した。この成果と、平成11年度～14年度の成果とを合わせて公表したいと考えている。

校正の段階で、興味ある現象が発見できたので報告する。その一つは、外来語が動詞化する現象である。動詞化には大別して2型がある。第1型は、「る」が付いて五段活用化する型で、「サボる」「ダブる」の類である。今回の調査で発見できたのは「バイオ（犯）る」「エンピ（嫉妬）る」（『魔風恋風』1904）、「ハイカる」（『発展』1912）、「ダブる」（『蟹工船』1929）（『大いなる助走』1979）、「サボる」（『蟹工船』1929）（『故旧忘れ得べき』1936）（『海軍』1943）（『点と線』1958）の5語を発見できた。そして「サボる」は「サボりだす」（『蟹工船』1929）のように複動動詞を造語するまでに一般化した。第2型は、「する」が付いてサ行変格活用する類である。「ラブする」（『雪中梅』1886）、「プロポーズする」（『浮雲』1890）、「キッスする」（『不如帰』1900）（『魔風恋風』1904）（『腕くらべ』1917）「ラブする」（『魔風恋風』1904）にはじまる66語が発見できた。そして、これら恋愛関係

の外来語から、「スタートする」「サービスする」「メモする」などへと意味分野が拡大していく。原語の移入時期と、意味との関係は今後の興味深い課題である。

第二には、外来語の表記の変化が見られることである。例えば、長さを測る単位メートル（フランス語 *mètre*）は、今回の調査範囲では、明治・大正期は「米突（メートル）」（『海底軍艦』1900）（『不如帰』1900）（『海に生くる人々』1926）、昭和前期には「メートル」と「メエトル」、太平洋戦争後は「米」（『肉体の門』1947）（『石中先生行状記』1949）（『美德のよろめき』1957）、昭和33年からは「メートル」（『点と線』1958）に統一されている。メートル法は、1799年フランスで制定され、1875年パリでメートル条約が締結され、日本は1885（明治18）年に加入した。1909（明治42）年度量衡法が制定され、1921（大正10）年専用を決定した。制度の輸入と表記との関係も今後の課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 飛田良文、「辞書の正確さとは何かー「全然」の語義について」、ユリイカ、査読無、44 巻 3 号、2012、70-75.
- ② 飛田良文、新井菜穂子、「『開明新語往来』（明治 7 年刊）の用語索引」国際基督教大学アジア文化研究、査読有、37 巻、173-222、2011.

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 飛田良文、(2011.08.06)「S・R ブラウン著 *Colloquial Japanese* の成立事情 (3)」日本英学史学会東日本支部研究発表会、東京家政大学.

〔図書〕（計 2 件）

- ① 飛田良文、「国立国語研究所『日本大語誌』構想の記録」、港の人、2012、1012.
- ② 飛田良文、「現代日葡辞典」、小学館、2011、1471.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飛田 良文 (HIDA YOSHIFUMI)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・名誉所員（独立行政法人
国立国語研究所）

研究者番号：40000418

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし